

# 己の道

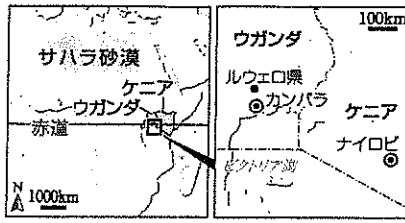
「エイズ孤児と出会った責任のよさに感じたんです。無償でできない。アフリカ東部のウガンダとケニアで、親を失った子どもたちや、エイズウイルス(HIV)陽性のシングルマザーらを支援する非政府組織(NGO)「PLAS」(東京都渋谷区)代表理事の門田瑠衣子(39)はこう語る。

国際支援に関心を持ってきつたのは大学三年の時。平和学の授業で、ナイロビのパナシオンでは幼い子どもが学校に行けず、安い賃金で働かされていると聞かされた。

「先生の話がずっと体に入ってきて離れなかった。私、行かなきゃって。周りの友人が就職活動に奔走する中、アルバイトで渡航費を稼ぎ、バスチケットも取得。インターネットで「ナイロビ・ボランティア」と検索し、画面の一番上に出てきた団体に連絡を取り、現地へ飛んだ。

団体の紹介で三週間、孤児院で子どもと遊び、笑い合った。そこで気がついた。「貧困にあえぐ子どもは何億人もいる。問題を解決する仕組みを見つけないと、そうした子どもはなくならない」。専門的に国際支援を学びたいと、大学院

カフェの前で談笑するHIV陽性のシングルマザーら=2019年、ウガンダで(PLAS提供)



## エイズ孤児・シングルマザー 困窮支援

# 誰も置き去りにされない世界へ

アフリカで活動NGO代表



門田 瑠衣子さん (39)

に進学した。

長期休暇に海外へ渡航。指導教授がアフリカを研究していた関係で、ケニアにも通った。電気も水道もない難所で医師と一緒に集落を回った時に直面したのは、エイズ患者に対する露骨な差別だった。

## 差別が障壁 啓発重視

エイズで親を失った子どもは世界で約千二百二十万人とされる。子どもは経済的に困窮するだけでなく、就職や結婚でも差別を受ける。社会に正しい知識がないため、負の連鎖が続く。門田が最初につづかったのも、そうした壁だった。

PLASが活動を始めた当初、ウガンダの首都カンパラから車で北へ一時間ほどのキリン県に、エイズで親を失った子どもたちのために学校をつくらせた。ところが住民は「親がエイズの子にまともな教育はいらない」と反対。工事を担った男性から法外な代金を要求されたり、「罵りに行く」と脅された。

当時を「めんどろになった」と振り返る門田は、同時に「飾り」は誤った情報に基づく差別と偏見。この障壁がある限り前進できないと悟った。時間をかけて住民に正しい知識を伝えようと心掛けた。現在に至るまで、啓発は重要視している活動の一つだ。

PLASは「PLASアソシエイト」を大切にしている。「もうアソシエイト(約1・6名)を先に本当に困っている人がいる」と捉え、国連機関や大規模なNGOと目を向け、小さな村を選んで支援。門田はじめスタッフが数カ月交代で現地に入り、政府が支援を始めるか、事業が軌道に乗るかといった場所に移る。

一六年十月から力を入れているのは、ウキン県の北のルワエロ県でHIV陽性のシングルマザーにカフェを運営してあげた。ウ

た。住民から「医者が来ると、周りがエイズだと思われ」と言われ、訪問を断られた。住民の間に知識がなく、情報も少ないため、当たり前のように差別と偏見があった。

生後間もない子どもも、その対象になる。二〇〇五年夏に訪れたケニアの孤児院で、ベッドに何人も赤ちゃんと無造作に寝かされた。じつと目を凝らしてみると、子、小さな痲瘋を立っている子、無心に指を吸い続ける子……。共通点は、親がエイズで亡くなった。発症して育てられなくなった。親を亡くした子どもを支援したいと、国際ボランティアに携わっていた学生ら七人PLASを立ち

「差別を恐れ、自身がHIV陽性であると言いつて命を落としていった人もいた。こんなことがあっていいのかわ。門田は同年十二月、HIV陽性者やエイズで親を亡くした子どもを支援したいと、国際ボランティアに携わっていた学生ら七人PLASを立ち

カンダでは、学費が払えずに七朝以上の子どもが小学校を卒業できない地域もある。特にHIV陽性のシングルマザーの家庭は深刻で、差別と偏見も安定した職に就けず、多くの子どもが小学校を去っている。

PLASはそうした家庭の自立を支援する。将来を守ろうと、現地のNGOと連携。経営に必要ない会計帳簿の書き方、パンや果物ジュースの作り方を教える研修会を開催している。初期費用の一部も補助し、カフェは十日にまで伸ばした。「将来の夢を話すと、字が書けない母親は二階建ての家の絵を描いてくる。地元ではアタンの平屋建てが一般的に二階建ては幸せの証」と門田は嬉しそうに話す。

門田の日常は忙しすぎる。三十一歳の時、NGOのリーダーや起業家の日中は忙しすぎる。三十一歳の時、NGOのリーダーや起業家の日中は忙しすぎる。三十一歳の時、NGOのリーダーや起業家の日中は忙しすぎる。



手をつなぐ啓発活動の門田(左二番目)とボランティアたち(東京都渋谷区)

上げた。そのうち一人が関わっていたウガンダで活動を始め、一年後にケニアも対象にした。国連によると、一九九七年時点の世界のHIV陽性者は三千八百万人。サハラ砂漠以南の国が七割近くを占める。ケニアとウガンダは百五十万人ずついて、年間計四万人が亡くなっている。

「声を上げなければ人間として救われないうけない。この訴えを門田は労働組合の専従職員だった父親に連れられ、熊本市で育った幼い頃から手毛に参加するなとしていた。社会に対して声を上げる大切さを、それができない人にも伝える教えられて育った。

そして、何事も前向きなだけじゃ長続きしない。「Positive Living through AIDS orphan (孤児) Support」の頭文字から取った団体の名前は、子どもたちにポジティブに生きてほしいという願いと、門田のスタッフ自身が前を向いて行こうという意味が込められている。

業者が集う懇親会で出会った縁で、民泊事業などを手掛ける門田(39)と結婚。七歳、五歳、三歳の男児と、おなかには五月に出生予定の男の子がいる。下の二人の子は保育園に預け、時にはベビーシッターを頼む。ネットスーパーで買い物をするなどして省力化し、夫婦とも残業はせずに午後六時の帰宅が約束。夫(41)三回で日帯を紡いでいる。

子どもの出産後はそれぞれ二カ月前に仕事を復帰。三男が生まれてからは、国内での業務に注力している。そうした中で起きたのがコロナ禍。ルワエロ県のカフェも軒並み休業した。

門田が心配したのは、経営する女性の栄養状態。HIV陽性者は、食事が取れないと薬の副作用が大きい。かといって投薬をやめれば命に関わる。そこで、それぞれに合ったネットフーズを生かして千八百円の米を現地で調達。他のNGOに先駆けて昨年四月に配布を始めた。女性の一人は「食事はコップ一杯のおかゆだけだった。いただいた米で命が助かった。感謝しかない」と伝えてきた。

PLASはエイズに限らず、貧困に苦しむ人を広く支援する。門田は活動の意味をこう考える。「誰かが、自分が生まれてきた価値を感じられる社会にしたい。その理想を実現するために私に与えられた舞台がアフリカだった。誰も置き去りにされない世界を目指し、アフリカへつづける」

(木原智子、文中敬称略)